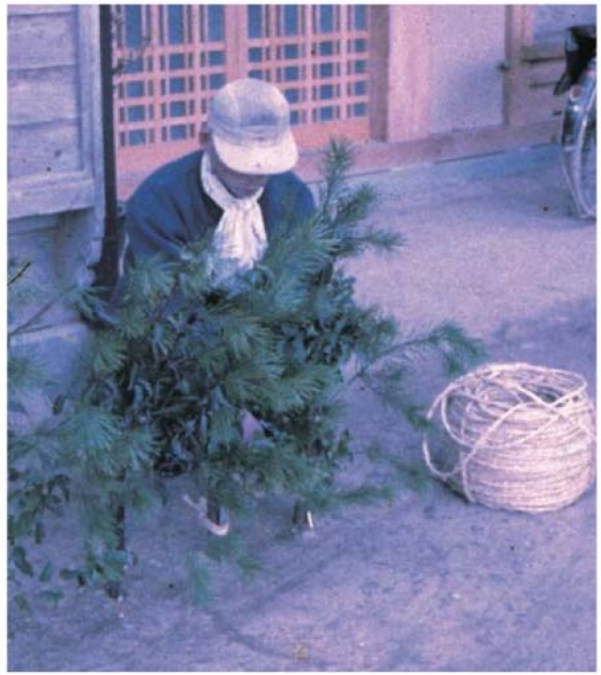
第21回

ていねいな暮らしのあったころ

佐野一彦の撮った伊深の里山



「門松を立てる」 昭和37年12月31日撮影

「門松立て」

新年を迎えるため、昭和30年から40年代ごろは、年の瀬が近づくとすす払いや門松の準備、餅つきなどをしました。

門松を立てることを、この辺りでは「お松むかえ」といい、近くの山から松とウラジロ、赤い実のついた「フクラド(ソヨゴ)」を採ってきて立てました。それに和紙で幣帛(へいはく)をかけ、オヤスというワラを輪にしたものをつけて作りました。門松は、家の門(かど)や倉、井戸などに立てました。臼や農具もきれいに洗い、しめ飾りをつけて新年を迎えました。

年が明けて二日目は、農家にとって仕事始めの日でした。苗田を鍬で3回ほどおこしたところに松を立てて幣帛をかけ「うち初め」をしました。この日は、縄ないなどの仕事をしたほか、子どもたちは書き初めをしました。

「正月の立臼の松」 昭和40年1月1日撮影